

2022年5月8日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「あなたがたに平和があるように」ヨハネによる福音書 20章19-29節 高橋彰

イエス、弟子たちに現れる

20 19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

イエスとトマス

24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

14:5トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」6イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

「あなたがたに平和があるように」と、復活の主イエス・キリストは弟子たちの前に現れ、真ん中に立って言われた、とあります。その宣言が今日の段落の中で3回も繰り返されます。復活の出来事、そして弟子たちへの顕現の理由はこの言葉と深く結びついていることを覚えていたいと思います。

イエスや弟子たちが用いたヘブライ語で「シャローム・アレーイム」(שלום וְאַלְעָם)は、「みなさん、こんにちは」と日常的に交わす挨拶の言葉でもあります。しかしこの当たり前の「シャローム」があらわす意味は重要です。

シャロームは、満足、満腹という意味を持っており、そこから充足している状態、安心、繁栄、平和をあらわす言葉として用いられます。弟子たちは「恐れ」があり、「鍵をかけて」家の中に閉じこもっていました。ここでいう「ユダヤ人」とはユダヤ社会のマジョリティの人びと、そして権限を持ち、大衆を扇動し、力を振るうことができ、…イエスを強引に死刑にさせることへと導いた…、またそれに同調した人びとです。弟子たちは自分たちもイエスの仲間だと見なされ同じ目に遭うことを恐れていました。さらに自分たちもその力に抗えずに入ることなく、イエスを見捨てて裏切ることになってしまった事実は、弟子たちの心の内側からの崩壊、挫折感、をもたらしていたかもしれません。

そのように社会を「恐れ」、外に出られず、自分の家に閉じこもっている状態である限り、「平和」に生きることは難しいです。平和とは、自分として外に出ても攻撃される恐れがないこと、他の人びとと安心して、好意的に出会い、関わることだとも言えます。

復活の主イエスは、十字架につけられた傷、痛み、苦しみをそのまま遺した姿で現れました。復活はそれまでを「なかったことにする」リセットではありませんでした。苦しみ痛まれ、侮辱された方が、その姿で現れた、神のカミングアウトでした。復活は自己完結的に完成されることではなく、傷や弱さがそのままありながら他の人びとの前

に姿をさらすことができ、その相手とつながってゆく(ヨハネ15:5)のような新らしいのちの姿でした。神の勝利は、勇ましい強さではなく、弱さや傷が恥ずかしものとしてではなく、非暴力で、和解をもたらす姿として示されました。苦難を乗り越えた喜びが湧き出るような平和の姿でした。イエスは弟子たちに息を吹きかけて聖霊を送りました。それは自分たちのうちに引きこもっていた弟子たちを外へと送り出し、他者に向かわせ「赦し」の力を与えました。それは大きな力によって裁定され正義や和解が決定されることに脅かされないのでなく、弟子たち一人一人に解放を与える励ましの言葉でもありました。

マグダラのマリアに続いて、トマス個人のことが描かれます。トマスは出遅れました。他の人びとが復活の主イエスに出会ったときに不在だったために、他の弟子たちのように喜びと信頼を回復することができずにいました。一人、置いてきぼりに遭ったような思いがしていたかもしれません。誰かや何かを「信じる(信頼する)ことができない」、また「信頼を得られない」ということも「平和」と言えない状態だと言わわれているようです。人びとの集まりの中に、「信頼」を持てず持たれない人がいることがあります。わたしたちの礼拝も共通する点もあるように思います。礼拝の場に集まり祈る者たちの心は様々で、不安や不信の状態の人も当然います。実際には先に復活の主イエスに出会った弟子たちも、まだ「平和」に満たされてはおらず、戸にみんな鍵をかけているような恐れがあったのです。イエスは再び現れて弟子たちの真ん中に立ち「あなたがたに平和があるように」と宣言されました。見て、触れて確信したいと言ったトマスにイエスが言われた「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」という言葉を、わたしたちも信仰の支えにしたいと思います。